“雌雄を決す”[注16]楚漢戦争[注1]の跡を訪ねる

『項羽と劉邦』の旅

鴻門の会、匹夫の勇、
背水の陣、四面楚歌、
覇王別姫、捲土重来

千歳発着13日間 ㈱世界紀行

後援:
中国国家観光局

2017年 5月9日(火)発~5月21日(日)着

ご旅行代金 ¥399,800 **一人部屋利用追加料金** **¥59,000**

日次	都市名	スケジュールと見どころ	宿泊地とお食事
1	千歳 北京 西安	■午後、千歳空港(または日本各地の空港)より、中国国際航空にて北京で乗継ぎ、陝西省の**「関中**[注2]**」**西安へ[13:50発/20:20着]。 ■着後、ホテルへ。	[**西安泊**] ☒✈✈
2	西安 鴻門宴址 咸陽(阿房宮址) 宝鶏	■午前、専用バスにて、劉邦が最初に関中に入ったときや、『**鴻門の会**』[注4]の際に陣を張った**「覇上」**(**“法三章”**[注3]の地)に立寄り、**鴻門の会遺址**へ。観光後、項羽が焼き払った咸陽宮の遺物を保管する**秦咸陽宮遺跡博物館**を見学します。 ■午後、**漢代長安城**を観光し、**秦阿房宮前殿遺跡**の見学です。 ■その後、黄河最大の支流**渭水**を超えて、当時の陳倉、現在の**宝鶏**へ。	[**宝鶏泊**] ☕🍴🍴
3	宝鶏 留壩 褒斜古桟道 漢中	■専用バスにて、**黄河・長江の二大水系の分水嶺・秦嶺山脈**の古代の難所・**蜀の道**の西の関**「大散関」**を通り、長江の代表的な支流**漢水**の**“左遷”**[注5]の地・**漢中**へ。 ■**“暗渡陳倉”**[注10]の**古陳倉道**をバスにて走ります(対面古陳倉道の碑)。 ■劉邦に仕えた軍師・**張良廟**や、張良が三略[注11]を与えられた**授書楼**[注11+]、張良が神仙赤松子と囲碁を打った**第三洞天**[注12]を見学します。 ■**“蕭何月下追韓信”**[注7]の地で、『**寒渓夜漲**』[注8]の碑をご案内いたします。 ■**“明修桟道”**[注10+]の石門桟道跡**「褒斜古桟道」**を訪れます。	[**漢中泊**] ☕🍴🍴
4	漢中 西安 南京	■漢の高祖劉邦が漢王に即位した際の行宮・**古漢台**(現・**漢中博物館**)を見学します。 ■**“匹夫の勇、婦人の仁”**[注9]、 劉邦が韓信を将軍に任じた**拝将台**と韓信像を訪れます。 ■名物の**「漢中菜豆腐」**もご賞味ください。 ■その後、西安空港へ。夜、航空機にて、江蘇省の南京へ。着後、ホテルへ。 **南京に連泊**します。	[**南京泊**] ☕🍴🍴
5	南京 (馬鞍山和県)	■午前、馬鞍山和県烏江鎮にて、**項羽の廟「西楚覇王霊祠」**を観光します。 ■また、和県烏江蒲にて、**“捲土重来” 烏江亭**[注19]にもご案内します。 ■午後、**南京市内観光**(**南京博物院**、世界遺産**明孝陵**など)。夕食は**江蘇料理**です。 ■夜には賑やかな**夫子廟**の散策をお楽しみください。	[**南京泊**] ☕🍴🍴
6	南京 垓下 霊壁 宿遷	■午前、専用バスにて、安徽省北部の固鎮へ。**“四面楚歌”**『**垓下の戦い**』[注17]が行われた**垓下古戦場跡**を訪れます。 ■午後、宿州市霊壁の虞姫文化園にて、**“覇王別姫”虞美人**[注18]**の墓**に参ります。 ■その後、専用バスにて、項羽の出身地・**宿遷**へ。	[**宿遷泊**] ☕🍴🍴
7	宿遷 徐州	■午前、覇王項羽の故郷・**項王故里**を見学します。 ■その後、「彭城の戦い[注13]」の地で、**「西楚の覇王」の都**・徐州(旧**彭城**)へ。 ■午後、**漢兵馬俑博物館**(中墓道、裏墓道、**水下兵馬俑館**)、漢代最大の墓・**漢の楚王墓**など、徐州市内観光にご案内します。 **徐州にも連泊**いたします。	[**徐州泊**] ☕🍴🍴
8	(沛県) 徐州	■午前、専用バスにて、劉邦の故郷・**沛県**へ。漢城公園(**沛宮殿**、漢高祖原廟)“、**大風の歌**”**歌風台**(沛県博物館)[注20]を見学します。沛県は、**蕭何**や鴻門の会で活躍する**樊噲**の出身地でもあります。 ■午後、徐州に戻り、**項羽戯馬台**[注6]の見学。**徐州漢画像石芸術館**(伏羲、女媧、炎帝、九尾の狐など)、快哉亭公園と徐州古城壁などもご覧いただきます。	[**徐州泊**] ☕🍴🍴
9	徐州 石家荘	■出発まで、徐州市内観光。**徐州博物館**(金縷玉衣、玉[翡翠]で出来た葬服、彭城王后墓など)、亀山漢墓と聖旨博物院を見学いたします。 ■午後、徐州より、高速鉄道にて河北省の**石家荘**へ[約4時間]。	[**石家荘泊**] ☕🍴🍴
10	石家荘 井陘口 蒼岩山風景区 保定	■韓信が『**背水の陣**』[注14]を敷いた場所で、李左車の名言**“敗軍の将、兵を語らず”**[注15]の地・井陘口へご案内します。**中国三大懸空寺**の一つ蒼岩山風景区『**橋楼殿**』も訪れます。 ■その後、専用バスにて、**保定**へ。	[**保定泊**] ☕🍴🍴
11	保定 易県 北京	■午前、易県にて、燕の刺客・荊軻が秦に旅立つにあたり**「風蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去りて復た還らず」**と歌った**易水**、燕下村、**燕下都遺跡**を観光します。 ■午後、『**始皇帝暗殺**』**荊軻塔**を見学した後、専用バスにて北京へ。 ■夕食は、名店『**全聚徳**』にて北京ダックなど**北京料理**をお召し上がりください。 **北京に連泊**です。	[**北京泊**] ☕🍴🍴
12	北京	■午前、**中国国家博物館**の見学。昼食は、**北京風シャブシャブ**です。 ■午後、**頤和園**にて諧趣園と728mの長廊を観光。蘇州街も散策します。夕刻、**瑠璃廠**も訪れます。 ■夜は、「梨園劇場」にて、**京劇『覇王別姫』を観賞**します。	[**北京泊**] ☕🍴🍴
13	北京 千歳	■午前、中国国際航空にて、帰国の途へ[08:00発/12:50着]。 ■午後、千歳空港(または各空港)到着。税関検査終了後、解散。	☕✈☒

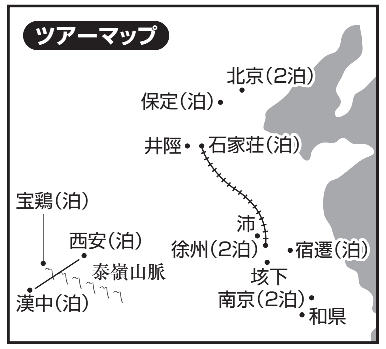
ご旅行条件

■募集人員/16名様限定
■最少催行人数/8名様
■旅券必要残存期間/入国時3ヶ月
■全食事付/朝食12回・昼食11回・夕食11回
■千歳空港使用料/¥1,030(別途必要)
■**旅行代金には、海外の空港税、出国税、航空保安税が含まれております。**
■**弊社では燃油サーチャージを別途徴収いたしません。**
■千歳空港より、全行程、社員添乗員同行
■トランク往復無料託送サービス[ご自宅~空港~ご自宅]
※**成田・関空・中部・福岡など日本各地の空港から出国して、北京空港で合流するプランも同料金にて承ります(日本の国内空港使用料が別途必要です)。**

ご利用予定ホテル

《西安》大雁塔和頤酒店★★★★
《宝鶏》萬福七星國際酒店★★★★
《漢中》古龍酒店★★★★
《南京》江蘇辰茂新世紀大酒店、黄埔大酒店、
金渾大酒店★★★★
《宿遷》江山大酒店、国際飯店★★★★
《徐州》興隆国際大酒店、海天暇日酒店、
金陵金源大酒店★★★★
《石家荘》国際大厦★★★★
《保定》中銀大厦★★★★
《北京》天壇飯店★★★★
※上記ホテル又は同等クラスとなります。

ツアーマップ



- ●如何せん古代の、尚且つ戦乱期の土地を巡るため、写真写りの良いものはあまり残ってはいません。ぜひ、**司馬遼太郎**『**項羽と劉邦**』か**司馬遷**『**史記(項羽本紀・高祖本紀・淮陰侯列伝)**』をお読みいただくか、ビデオ/DVD『**項羽と劉邦 King's War**』をご覧いただいて、ご検討いただければとおもいます。『**さらば、わが愛/覇王別姫**』のDVDも京劇をご覧いただきますので一応、参考になります。
- ●前半の陝西省地域も、後半の安徽省北部も、それぞれ**「史記」**が大好きなガイドがご案内いたします。

注釈解説

[注1] 秦王朝末期　前210年、陳勝・呉広の乱に**“先んずれば人を制す”**※と諭され参加した後の「西楚の覇王」項羽と「漢王」劉邦が、秦王朝滅亡の前206年から前202年にわたり覇権をめぐり繰り広げられた戦い(※「先んずれば人を制す」の語源はこれに由来。)

[注2] **函谷関の西側**で、山に囲まれた咸陽(西安)を中心とした渭水盆地。秦王朝の中心部。

[注3] 劉邦はここで、苛烈で尚かつ細か過ぎる秦の法律を**「人を殺せば死刑。人を傷つけた者は処罰。人の物を盗んだ者は処罰。」**の3条のみに改めて、関中の民衆の支持を得た。以後、転じて、法律を簡略でゆるやかなものとし、法治万能主義を排することの意味で使われる。

[注4] 劉邦が先に関中に入り、**函谷関**を閉じたことの侘びを項羽に入れるために開かれた会見の宴席(前206年)。劉邦の殺害を狙う**范増**とそれから守る**項伯**、**張良**、**樊噲**の活躍を記した史記のハイライトシーン。

[注5] 鴻門の会の後、西楚の覇王となった項羽は、劉邦に約束の関中ではなくその**西の辺境・漢中**の地を与えた。劉邦を**左(西)に遷した**ことが、**左遷**の語源となる。

[注6] 秦を倒した項羽は、地の利の良い咸陽(関中)を都とするように進言されたが、故郷に錦を飾るために**楚の彭城(徐州)を都**と定め、**「西楚の覇王」**を名のり、ここで兵馬の訓練をした。

[注7] 漢王劉邦に仕える**蕭何**が、功を認められず漢を去ろうとした**韓信**を追ってこれを思い留まらせ、劉邦を説いて韓信を大将軍に取り立てた故事。

[注8] 夜中に突然の大雨で**寒渓河**が増水し、韓信が寒渓河を渡れず蕭何に追いつかれた場所。**漢王朝成立の立役者・韓信**が、この夜に限って河が増水して、漢に留まることになった奇跡が中国では人気がある。

[注9] ここで韓信が劉邦に説いた項羽の性格分析(弱点)。“分別がなくただ血気にはやる、取るに足らない男の勇気”と、“思慮が浅く実態の伴わない女の同情心・やさしさ”。

[注10] 三十六計の第八計。陳倉は地名。

[注10+] **明修桟道**、**暗渡陳倉**。訓読は、**明らかに桟道を修し、暗かに陳倉に渡る**。劉邦は漢中から関中へ進軍する意図がないことを示すために、両地を結ぶ**蜀の桟道**を焼き払った。劉邦の臣下・韓信は、桟道を目立つ大人数の人夫で修理させるのとあわせ、密かに秦嶺山脈を大きく迂回し、陳倉から旧道を利用して関中を奇襲する作戦を実行した。偽装工作と奇襲をあわせて行う戦術のこと。

[注11] **太公望兵書**。中国の代表的な兵法書。その中の一巻『**虎の巻**』は慣用句にもなっている。

[注11+] 始皇帝暗殺に失敗した**張良**が身を隠していたとき、兵法の祖・**黄石公**から太公望兵書[三略]を与えられ、「十年後には王者の軍師となるだろう」と告げられた処。

[注12] 洞天は、道教において仙人が住む処。ここは中国道教**「十大洞天」**のひとつ。

[注13] 前205年、項羽が華北の反乱制圧に向かった際、**暗渡陳倉**で漢中を得た劉邦は、軍勢56万を引き連れ、項羽の都・彭城を占領した。怒った項羽は精鋭3万の兵を率い、彭城へ引き返すと漢軍20万を殺し圧勝する。劉邦の父親は捕らえられ、劉邦は馬車で逃げるが恐怖に駆られ、重さで馬車が遅くなるのを避けるため、幾度も妻と我が子を馬車から突き落とした逸話が残る。北から戻った韓信が残った漢軍をまとめ、楚軍を迎え撃ち、それ以上の項羽の西進を防いだ。

[注14] 劉邦軍が項羽軍と対峙している間に北方の諸国平定に向かった**韓信**の漢軍は、劉邦本軍に兵力を回していた為、3万の軍勢で魏を倒したのち、さらに趙軍20万と戦わなければならなくなった(前204年)。趙の将軍**李車左**は、**井陘口**という太行山脈の狭い谷間を利用して挟撃する作戦を立てたが、趙の宰相陳余は大国・趙が少数相手に策を弄して諸国に侮られることを恐れ、正攻法に拘った。密偵からこの情報を得た韓信は、安心して井陘の隘路を通り抜け、川を背にして布陣し城砦を築いた。水を前にして山を背に陣を張る兵法の基本の逆を行った漢軍を軽んじ侮った趙軍は全軍をぶつけてきた。戦闘を容易に考えていた趙軍と、逃げ道がなく必死に戦う漢軍は一進一退を続け、嫌気が差した趙軍は一旦、城に引き返すことにした。しかしそこには大量の漢の旗がはためいていた。韓信は裏で二千の兵で趙の本城を襲わせていた。もちろん、まともに趙軍を戦ったらひとたまりもない人数だが、漢の大軍に城が落とされたと動揺した趙軍は逃亡をはじめ、後方から韓信の本軍に攻撃され敗れた(**井陘の戦い**)。この**「背水の陣」**は、退路を断ち(退路を絶たれ)決死の覚悟を持って事にあたる意味の故事成語となっているが、自暴自棄とは異なり、相手を侮らせて城外に誘い出し、大量の旗を持たせ動揺を誘う心理戦など、本来は総合戦略の一部であり、実際、戦いの前に韓信は将軍たちにその晩の祝宴を約束している。

[注15] 趙の宰相陳余は趙王とともに捕らえられ処刑されたが、韓信は趙の将軍**李車左**には上座を用意し先生と敬い、次の燕と斉の攻略の策を尋ねた。そのときに李車左が恥じ入り、応えた言葉(**敗軍之将、不可以言勇**)。なおも聞く韓信に**「智者は千慮に一失が有り、愚者も千慮に一得が有る」**とあくまで愚者の策であると前置きした上で、疲れている韓信軍は休ませる。少数で魏、趙を破った韓信を燕も斉も恐れている。趙の戦死者の遺族に施しを与え、彼らを使って燕を攻め、且つ、降伏する利を説き、懐柔する。との策を授けた。韓信はその策を用い、燕王を服従させた。

[注16] 前206年からの漢王・劉邦軍との戦いに辟易していた項羽が、前203年、劉邦に一対一の対決を申し込んだときの言葉。これが語源。

[注17] 戦い上手で連戦連勝の項羽ではあったが、猜疑心が強く、感情の激しい性格から次第に部下の離反を招き、多くの諸侯も領地の約束を乱発する劉邦に寝返った。前202年、追い詰められた項羽軍は彭城の南、**垓下**に籠城する。ある夜、四方を囲む漢軍から故郷の楚の歌が聞こえてきた*(**四面楚歌**)。故郷・楚の人たちさえも劉邦側に付いたことを知った項羽は、もはやこれまでと腹を決め、最後の戦いに挑み自決を覚悟した。しかし、それには寵愛する愛妃**虞美人**が邪魔であった。別れの宴席で項羽は**「垓下の歌」**を詠み、繰り返し歌った。(*漢軍側の策略ともされる。)

「垓下の歌」項羽(前202年)

力は山を抜き 気は世を蓋うも
時に利あらず 騅 逝かず
騅 逝かざるを奈何すべき
虞や虞や 若を奈何せん

我が力は山をも引き抜き 気迫はまだ世の中を蓋い尽くすほどなのに
時勢の不利を悟り 愛馬の騅も進んでくれない。
騅が進んでくれないのに 何ができようか。
愛しき虞よ 汝をどうしたらいいのだろう。

項羽も家臣たちも泣いていた。《虞や虞や　若を奈何せん》項羽の悲痛な叫びである。虞美人に「すまんがお前が先に死んでくれまいか」と頼んだのである。はらはらと涙を流す項羽に、虞美人は**返歌**を和した。《 **四方楚歌の声　大王　意気尽きて　賤妾　何ぞ生に聊んぜん** 》 四方からの楚の歌で、大王様が気力を失われているのに、どうして私などが生きていけましょう。虞美人は剣舞を舞って、その刃で自害する。京劇**「覇王別姫」**のクライマックスの場面。

[注18] 項羽の寵姫。**虞姫**ともいう。彼女の亡骸の跡にケシの花が生え出で、虞美人が流した鮮血に染められたかのような**真紅の花を咲かせた**という伝説があり、以来人々はその花(ヒナゲシ)を**虞美人草**と呼ぶようになった。司馬遼太郎の小説では、もとは斉の貴族の娘だったが、秦崩壊後、国を追われ家族とも死別し住む家もなく貧窮してしまった。路上で寒さに震えていたその姿を哀れんだ項羽が拾い上げ、身の回りの世話をさせ、やがて寵姫となったことになっている。同小説では、最後は自害ではなく、虞美人の意志を歌と舞いから汲み取った項羽の剣によって命を絶たれる。

[注19] 楚漢戦争最後の決戦・垓下の戦いに敗れた項羽は敵の包囲を破り、わずかの手兵と長江の渡し場・**烏江**(安徽省馬鞍市和県)まで落ちのびた。項羽はここで亭長(村長)から、ここでは自分しか船を持っていないので漢軍は河を渡れないから、ぜひ長江を渡り、江東で王となり、**“捲(巻)土重来”**、力を蓄えて再挙を期するように勧められた。項羽は、昔この河を渡るときに連れてきた江東の子弟八千人を失って何の面目があろうかと断り、敵軍の前で自ら首をはねた。それから1000年後、晩唐の詩人**杜牧**は長江と**烏江亭**を見下ろす高台を訪れて、項羽の死を惜しみ、判官贔屓もあってか、もしも項羽が村長の勧めに応じて長江を渡っていたならばと想像しつつ、**七言絶句**を書きつけた。**「題烏江亭」**。題とは壁などに漢詩を書くこと。

「烏江亭に題す」杜牧(839年)

勝敗は兵家も事 期せず
羞を包み 恥を忍ぶは 是れ男児
江東の子弟 才俊多し
捲土重来 未だ知るべからず

勝敗は兵法家でさえ予測できない。
恥辱に耐え 再起を図かってこそ 真の男だろう。
項羽の出身地、江東地方には優れた人物が多かったという。
砂塵を巻き上げる勢いで もう一度攻め上がっていたならば
結果はわからなかったではないか。

北宋の詩人**王安石**は、この詩に和して《**江東の子弟　今在りと雖も　肯えて君王の与に　土を巻いて来たらんや**》と詠み、項羽と虞美人に対する中国民衆の判官贔屓に批判的です(**和題烏江亭**)。

[注20] 項羽を打ち破り、以後約400年つづく漢王朝を起こした劉邦(初代皇帝**高祖**)が、晩年、故郷の**沛**に立ち寄って、地元の男120人を集めて宴を開いた場所がここととされる。そのときに詠んだのが『**大風歌**』で、劉邦絶頂期の詩。

「大風の歌」高祖劉邦(前196年)

大風起こりて 雲 飛揚す
威は海内に加わりて 故郷に帰る
安くにか猛士を得て 四方を守らしめん

項羽という激しい風が吹き起こり、空に雲が湧き上がるかのように私も立ち上がった。戦いを勝ち抜いた我が威光は天下に響き渡り、そして今、故郷に錦を飾っている。どこで猛者を得て、国を守らせるとしようか(沛のお前たちはどうだ?)。